



NO.32

September 2003

CIEC Newsletter

お知らせ

<研究会 開催のお知らせ>

- ・ CIEC 第 38 回研究会
 テーマ:「プログラミング教育を見直す」
 日 時: 10月18日(土) 13時30分～17時
 会 場: 大学生協 杉並会館 会議室
 報 告: 綾 皓二郎氏(石巻専修大学)

- ・ PCカンファレンス北海道 2003 17
 日 時: 10月25日(土)～26日(日)
 会 場: 北海道教育大学 函館校
 <詳細は
<http://www.hokkaido.seikyoku.ne.jp/pcch2003/main.htm>
 をご覧ください>

<03年9月 CIEC 会員状況>

| | | | |
|--------|--------|------|----|
| ・ 個人会員 | 787 | | |
| 教員 | 501 | 大学職員 | 23 |
| 院生 | 46 | 学生 | 15 |
| 生協職員 | 89 | 企業 | 25 |
| その他 | 28 | | |
| ・ 団体会員 | 100 団体 | | |
| 企業 | 38 | 生協 | 58 |
| 大学 | 1 | 高校 | 1 |
| 法人 | 2 | | |

CONTENTS

<ニュース・トピックス>

- ・ CIEC 第 35 回研究会報告 2
- ・ CIEC 第 36 回研究会報告 5
- ・ CIEC 第 37 回研究会報告 7
- ・ 2003 PCカンファレンス 鹿児島 開催速報 18

< CIEC 活動報告 >

- ・ 2002 年度第 2 回 CIEC 運営委員会報告 8
- ・ 2002 年度第 3 回 CIEC 運営委員会報告 11
- ・ 2002 年度第 2 回 CIEC 理事会報告 13
- ・ CIEC 表彰規定制度の提案 14
- ・ 2003 年度 CIEC 定例総会報告 15
- ・ 2003 年度 CIEC 定例総会 意見回答 15

< CIEC 新会員のご紹介 >

- ・ 03年8月以降に CIEC に入会された個人・団体
 の方々を会員の皆様に紹介します 17

News & Topics

-CIEC 第35回研究会報告-

日時 2003年5月17日(土) 13:30 ~ 17:00

会場 セシオン杉並

テーマ: 「どうする『情報』の評価」

講演 「高等学校の情報科が始まって」

中村 一夫

(茨城県教育研修センター元国立教育政策
研究所・文部科学省教科調査官)

「ルーブリックを用いた評価について」

加納 寛子(愛知産業大学短期大学)

事例発表 川角 博(東京学芸大学附属高等学校)

司会: 奥山 賢一(CIEC 理事・小中高部会世話人)

開会挨拶 小野 進(CIEC 理事・カンファレンス委員)

いよいよ高等学校の情報科が始まり、現場教員の関心は評価の問題に集まっている。本日も講演いただく中村氏は元文部科学省教科調査官で、情報科教科書の「生みの親」とも言うべき方。本日は私見を交え、ざっくばらんなお話をいただく予定。引き続き愛知産業大学短期大学の加納先生からは、ポートフォリオとルーブリックを用いた評価法をご紹介いただく。また、東京学芸大学教育学部附属高等学校の川角氏からは実践事例の報告をいただく。CIECでは以前から情報科を含め、情報教育のあり方を考えてきたが、ひとつの成果として『実習へのフライト』を発行している。指導案づくりの参考に役立ててほしい。

講演

「高等学校の情報科が始まって」

中村 一夫(茨城県教育研修センター/元国立教育政策研究所 文部科学省教科調査官)

【私見】は個人的な意見であり、文部科学省の見解ではないので、そのように聞いてほしい。

教科目標について

「情報」の教科目標の要点は「情報化の進展に主体的に対応できる能力と態度を育てる」こと。要求されるのは、そ

れぞれの学校の実情に合わせて生徒の主体的能力と態度を育てることで、その内容は学校ごとに違う。他校の実践は直接参考にできるとは限らない。「情報嫌い」を作らないことが大切。

【私見】学校のインターネット接続状況、携帯電話の扱い、家庭でのインターネット利用の扱いなど、それぞれの状況に応じて何をすることを考えることが大切。「うちは進学校だから」やらないのではなく、学校ごとに何をすべきかを考えて頂きたい。中学校レベルから復習しないといけない学校もあるかも知れない。

先生方には、指導要領解説(「ピンク本」)を見ながら、教科書に振り回されることなく、各校の実情にあった指導内容を考えて頂きたい。情報科の教科書は13社から出ていて、各社それぞれに特徴ある内容となっているが、いちばん合っているものを選んでも実情に合わない部分もある。うまく利用して欲しい。

【私見】学期の最初から難しいことをやるとスキル差が問題になる。みんなが理解できる内容からはじめ、できている生徒にはうまくアシスタント役をさせ、「評価」は学期が終わってどれだけ成長したかで考えて欲しい。「情報社会・モラル」は是非扱ってほしい。実習の中で折に触れて話すことで、年度末に「時間切れ」ということが避けられる。これをやらないと「画竜点睛」、教えたことが社会に出て生かされない。

実習は「ねらい」や「生徒の興味・関心や技能」をよく考えて課題を作成することが大切。例えばタイピングにしても、速く正確なタイピングが求められる具体的な状況と結び付けることで理解や意欲が増す。

評価について

【私見】評価規準が出ていないということは、皆さん独自に工夫していただけたということ。「基準」ではなく「規準」なのは、数値化ばかりでなく質的評価をして欲しいということ。教科の3目標と4観点のマトリクスで捉えるとわかりやすい。毎時間すべての生徒に対してすべての観点を評価するのは大変。時限ごとに重点を決め、両極の生徒を押さえておけばよい。70時間の授業のうち20回チェックし、それぞれの生徒が良い/悪い意味でチェックされた回数を見ればだいたい分かるはず。



【私見】評価の規準・基準を事前に示すことで、生徒も課題に取り組みやすくなり、自己評価・相互評価などもしやすい。生徒自身が自分の評価に納得できることが大切。資料の中で「作品」ではなく「制作物」としたのは、美術作品とは評価の観点が違うからだが、美術や音楽の先生の評価法を参考にするのも良い。

【私見】ペーパーテストについても、前例がないから教師自身で工夫できる。答えがひとつに決まらない問題を作ってもよいし、材料を与えて作文をさせてもよいだろう。実習の経験が活きる問題を作るのもよい。関心・意欲・態度をはかる試験も不可能ではないだろう。

【私見】複数科目を担当すると、ハロー(後光)効果と言って、他の科目での評価を元に先入観で生徒を見てしまう傾向がある。できるだけ避けて欲しい。

質疑応答

Q1: 自分の中に考えがまだないのでお聞きしたいのだが、評価は先生と生徒との関係の中で決まるもので、極端に言えば相性が悪ければ評価は低くなるのではないかと。また「関心・意欲・態度」というのも科目そのものだけでなく先生に対する心理が入らざるを得ないのではないだろうか。「積み重ね」も所詮「足し算」で、数値化ではないのか。

A1: 毎回の授業では主観が入り込まないよう誰の目にも明らかかな状態だけをチェックしておき、最終的な評価は毎回の授業の積み重ねを見ながらすればよいでしょう。その際に単純な足し算にする必要はないと思います。

Q2: 「関心・意欲・態度」の評価が難しいのは情報科固有の欠陥に由来すると考える。情報科はそもそも情報化社会への適応教育として現れたもので、本来は総合的な学習と両方で一体をなすものを分けたことで、そもそも情報科には「関心・意欲・態度」を示すような内容は含まれていないのではないかと。

A2: それは先生の考え方・捉え方で、私からお答えできることはない。

Q3: 自宅にパソコンのある生徒とない生徒で予習・復習環境が異なるのをどうすれば良いか。

A3: 課題が重すぎるのではないかと。学校でできる範囲の課題にしたら良いと思う。

事例報告

「ループリックを用いた評価について」

加納 寛子 (愛知産業大学短期大学経営学部)

本年4月から愛知産業大学に移り、4年制の学生にITの基礎を教えている。2年制の学生には「教員になったときに求められるIT能力」という内容を指導する予定で、高校の先生とほぼ同じ状況にあるだろう。能力の差である「デジタルデバインド」よりも、意識の差である「インセンティブデバインド」が、より深刻な問題。家庭環境でIT機器に触れている学生とそうでない学生では能力も当然違うが、「楽しみ」「不安」という授業に対する感覚の違いが生じている。

事前に評価の観点を示すことで、学ぶべきポイントを意識しながら課題ができるので、効率的に学習ができる。

ポートフォリオとループリックについて

1980年代レーガン政権下のプロジェクト Agenda21 の一項目が「everybody counts」(「全ての子供を考慮する」「全ての子供が数えられるようになる」の掛け言葉)。小学校で20歳過ぎの生徒と一緒に学んでいる中で、皆に同じカリキュラムでは適応できない。そのような状況でポートフォリオを用いた学習が提案された。

ポートフォリオ(portfolio)の直訳は「紙挟み」。教育の中ではそこに挟む学習課程の記録を意味する。懸念として教師の負担が大きい、評価が主観的になるなどが指摘される。負担については特に目立つ傾向を示す生徒にのみ注目することで軽減でき、評価の客観性についてはループリックを用いることで解決できる。

ループリックは規準(項目)と基準(レベル)のマトリクスで、それぞれの課題がどのレベルまで達しているかを時系列的に視覚化できる。教師と生徒との合意に基づいてレベルを確認し、次のレベルに向けての指導をすることで生徒に学習指針と意欲を与えることができる。

Webの利用

活動中(レベル1-4)の課題は学内のみ閲覧可とし、相互評価などの対象とする。永久保存版(レベル5)になったら公開する。

事例報告

「情報の授業と評価の実践」

川角 博 (東京学芸大学教育学部附属高等学校)

協力態勢をつくる

情報科の授業をしようとするとき様々な問題があることがわかる。LAN 環境の整備などの人手のいる作業もある。学校でコンピュータを活用しようと思えば、ほかの先生を仲間に呼び込むことが不可欠で、そのためには、あらゆる科目でコンピュータを利用するように仕向けることが大切。レポートを Web に出すことで、生徒と教師の1対1から相互に見えるようになるなどメリットを伝える。修学旅行では、文献で分かることはすべて事前に調べ尽くし、どうしても現地に行かないとわからないことをテーマにして調べに行く。

情報の授業はすでに数年やってきている。TT、TAがいるので普通の学校よりはきめ細かい対応ができる。提出物はTT、TAで検討する。達成度が低い生徒は個別に指導し、最終的には全員が9/10以上の評価になるようにする。

評価

情報科だから評価が難しいわけではないと思う。課題は事前に各生徒にメールで出すが、その際に課題のねらい、評価の観点を明示する。「意欲・関心・態度」は見ているが評定を出すことが目的ではなく、能力をのばすための規準。評価のために別途時間を取るくらいなら、指導内容の充実にあてる。普通の授業の中で見ていれたいといわれる。大局を捉えることが大切。評価は目的ではなく向上のための手段と考える。教師として学んで欲しいことと学習指導要領との接点を見出し、ねらいを定める。ねらいをもとにコンテンツを作成し、指導案(台本)をつくる。指導案の簡略版を生徒への指示として配付する。

課題例

VSJ(Virtual Studio Japan)の過去の入場者数推移をもとに、累積入場者1000万人達成日を予測する。もちろん「正解」はない。最終プレゼンでどれだけ説得力のある説明ができるかを評価する。

討論

「『情報』の評価はどうするのか」

川角: ネタを求めてお越しの方が多いうのだが、生徒によって、環境によってできることや順番は当然変わってくるので、事例や指導書などをヒントにしながらも、結

局自分で作らないといけない。使えるものはうまく使しましょう。

会場: 5段階評価というのは可能か?

加納: 数値評価よりは質的評価が馴染むものもあるが、規準による。

川角: 3段階ないし2段階が多いが、じっくり課題を見る場合など5段階でつけることもある。個別指導は数値を見て対応するというよりも、授業中の様子からの「呼んで話さない」という感覚の方が先ではないか。

会場: 早稲田では1、2年で1時間ずつ情報の時間をおいた。積み上げ式、数値評価しやすい内容を1年次に、グループ制作などを2年次に振り分けた。

川角: 以前からTTをしていたが、敢えて担当教科の違う教師で組んだ。評定をする際に多面的な価値観が盛り込まれ面白い。色々な人を仲間に引き入れるのが大事。

加納: 地域等も含め、多く人の目で評価することはよい。

会場: 280名の制作物を評価するには、他の教科の先生にも意見を求めたりしている。

会場: 教科書はどう使うのか?読んでいると時間がない。

川角: みんなで読むことはあまりない。参考書。ただし参考にさせる場面は意図的に作っている。中学時代に教科書をどう使ったかを調べたことがある。「先生が使った」は国語7割、英語8割、数学、理科、社会は3割程度。一方「自習で使った」はむしろ逆転している。情報も自習では使うのではないか。

会場: プレゼンテーションの課題でルーブリックによる評価をし、ペーパーテストをしなかったら他の教員から苦情がきた。生徒は納得していた。

会場: 通信教育ではレポート提出が義務づけられているが、中には教科書の文面の虫喰い問題などもある。

加納: 「表現」などの評価はペーパーテストはできないのでルーブリックがよいと思う。他の先生には評価方法について十分理解してもらえば納得してもらえるとと思う。



-CIEC 第36回研究会報告-

川角: ペーパーテスト重視の傾向があるが、物理でもテストで100点でも評価は5/10ということもある。実験レポート等の観察がもっと大事。

会場: TTによる評価では、ひとりで評価する場合と違うどのような問題がでるか。打ち合わせをするには時間がある。

川角: 確かに時間がかかる。メールでやっている。先にねらいを明確にしておけば評価の時点では問題は少ない。ただし作品の評価では、教師間で合意できていたと思っていたが実はできていなかった、ということも多い。実際には授業の中で個別に指導することの積み重ねで良いのではないか。

川角: 「情報活用能力を身に付けさせる」というよりも、教育全体としてそれが必要になるようにすることが大切。同様に、情報科の内容がないと他の科目が成り立たないような関連性をもたせることが大事。

閉会挨拶

橘 孝博 (CIEC 小中高部会)

本日はたいへん多くの参加者を頂き、非常に嬉しい。CIEC小中高部会では昨年まで、どのような実践をするかを議論してきたが、ひとつ区切りをつけ、実施段階として評価の問題に着目した。今回は東北で地理的に遠いが、高校情報科を経た学生を受け入れるにあたり、大学では何をすべきかと言う、これまた重要な問題を扱う。また8月には鹿児島でPCCが開催される。是非多くの皆さんの御参加をお願いしたい。

文責: 山田 祐仁 (CIEC 小中高部会)



テーマ: 「大学における一般情報教育の過去・現在・未来」

日時: 2003年6月21日(土) 13:30 ~ 17:30

会場: 東北大学 川内北キャンパス

報告:

(1) 「大学の一般情報教育の変革」

武井 恵雄 (帝京大学)

(2) 「一般情報教育の現状と今後

~ 東北大学と東北薬科大学の事例を中心に ~」

早川 美徳 (東北大学)

佐藤 憲一 (東北薬科大学)

(3) 「プログラミング言語習得のための知的CAIモデル

~ 『ランドルト環(Landolt's ring)方式』による試み ~」

北守 一隆 (北海道工業大学)

まとめ: 奈良 久 (名誉会員)

司会: 綾 皓二郎 (石巻専修大学)

(敬称略)

この4月から高校における情報教育が必修化されたことを受け、大学における一般情報教育の意義があらためて問われている。こうした背景の下、本研究会は、大学における一般情報教育の過去を振り返り、現在を見つめ直し、さらに将来を展望することを目的として開催された。

ゲストスピーカーには、この問題に長い間精力的に取り組んでこられた帝京大学の武井恵雄先生をお迎えし、「大学の一般情報教育の変革」との題目で特別講演をいただいた。講演では、大学における一般情報教育の歴史を振り返り、高校における情報教育の必修化に伴い、大学における一般情報教育の役割が変わること、変わるべきことについて見解を述べていただいた。また、大学における一般情報教育のコアカリキュラム編成について、策定に至るまでの事情を説明していただいた。その他、デモを交えながら e-Learning に関する話題を提供していただき、その可能性について考察していただいた。

続いて、東北大学の早川美徳先生と東北薬科大学の佐藤憲一先生には、「一般情報教育の現状と今後」との題目で、両大学における情報教育の現状を紹介していただいた。まず、早川先生には、東北大学理学部の事例から、情報教育のための施設の概要や講義の内容、さらに学生

のアンケート調査に基づき、大学における情報教育の役割について見解を述べていただいた。また、デモを交えながら、プログラミング言語演習の事例を紹介していただいた。

佐藤先生には、東北薬科大学の事例から、医療系の大学における情報教育の役割について見解を述べていただいた。学生のデジタルデバイドを防ぐには、アンケート調査による状況把握と、それに応じたリテラシー教育が重要であること、概論だけでは情報教育の効果は期待できず、分かりやすさを第一義とした実践型の講義が重要であるとの見解を述べていただいた。また、e-Learningに関連して、分子構造等の理解には、CGによるビジュアルライゼーションが有効であるとの指摘をいただいた。

最後の講演として、北海道工業大学の北守一隆先生には、「プログラミング言語習得のための知的CAIモデル」との題目で、e-Learningによるプログラミング言語演習の事例について紹介していただいた。e-Learningでは学習者の適切な評価が重要であり、これを視力検査に用いるランドルト環に見立てるといったアイデアを披露していただいた。

講演終了後、多数の質問や意見が出されたが、以下、主なものを紹介する。

まず、秋田大学の中村彰先生より、e-Learning化を広く推し進めるには、見習うべき成功事例を呈示することが重要ではないか、との意見が出された。それに対して、武井先生は、e-Learningの欠点であるインタラクティブ性を補うには、オンキャンパスで対応することが重要であり、両者を上手に使い分ける必要があるとの回答を述べられた。

また、同じく秋田大学の中村彰先生より、ビジュアルライゼーションはe-Learningそのものではないのではないかと、との意見が出された。それに対して、佐藤先生は、視覚的説明は学生の理解を助ける強力なツールになり得るが、さしたる努力を要せず知識を習得することが、果たして大学における教育の本質なのかどうかは、意見が分かれるところであるとの回答を述べられた。

続いて、酪農学園大学の森夏節先生より、情報教育のための施設として用意された東北大学の相談室の利用状況について質問が出された。それに対して、早川先生は、相談室はコンピュータに関するあらゆる質問を受け付ける施設として運用されていること、しかしながら、コンピュータに関心が低い学生が増えてきたのか、最近では利用者が減ってきているとの回答を述べられた。

また、帝京大学の武井恵雄先生より、e-Learningでは学

習者の履歴を適切に利用することが重要であるとの意見が出された。それに対して、北守先生は、心理学の成果も合わせて、学習者の履歴と知識体系をオブジェクトの関係と階層で捉えるe-Learningシステムを今後構築する必要があるとの回答を述べられた。

その他、東北大学医療技術短期大学部の佐藤行彦先生より、情報教育のためのシステム構築と運用に関する質問、岩手大学の宮本裕先生より、情報教育における採点方法に関する質問、東北大学生協の谷内毅氏より、学生のリテラシー教育の現状についての質問が出された。

最後に本研究会のまとめとして、CIEC名誉会員の奈良久先生よりコメントをいただいた。奈良先生は、現在、学生の理科離れ問題に関するプロジェクトに参画し、e-Learningの可能性についても検討しておられる。e-Learningが本来ビジネスを目的として誕生した経緯について述べられた後、しかしながら、e-Learningはこれまでのところ期待したほどの成果をあげておらず、現在もお発展途上にあるとの事情を説明していただいた。また、カナダや北欧におけるe-Learningの現状等を紹介された後、e-Learningはオンキャンパスとネットワークを利用したハイブリッドの形態で運用していくことが重要であるとの見解を述べていただいた。

本研究会では、過去と現在を中心として話題が展開し、残念ながら、未来への展望については十分な議論にまで至らなかったが、大学における一般情報教育をとりまく状況を整理し、意見交換を通して、参加者の問題意識を高めることができたことは大きな収穫であったと言える。賛否両論のあったe-Learningに関しては、その守備範囲を含め、さらなる検討が必要であるように思われる。e-Learningは検定試験に必要な知識の詰め込みは得意であるが、体系的な知識を組み合わせなくては回答できない応用問題となると太刀打ちできない、との指摘がいくつもなされたが、今後、この課題がどのように解決されていくかが、一般情報教育におけるe-Learningの普及の鍵を握っているように思われる。

文責：青木 直史（北海道大学）



－ 第 37 回 CIEC 研究会報告 －

テーマ：「大学における情報リテラシー教育の取り組みと実際」

日時：2003年6月28日（土）13：30～17：30

会場：セシオン杉並

報告1：「千葉大園芸学部の情報教育への取り組み」 本條 毅（千葉大学）

報告2：「学芸大学の情報処理教育への取り組み」 伊藤 一郎（学芸大学）

まとめ 森 直之（東京理科大学生協）

司会 仲田 秀（明治大学）

参加 47名（講師含む）

（敬称略）

2004年4月にむけて、国立大学は各々が法人格をもつ国立大学法人としてスタートする準備をすすめている。これに伴い各国立大学は、「学生の教養教育の成果に関する具体的な目標の設定」を初め、大学の学生に提供する教育施策、環境整備に関する計画などを盛り込んだ「中期目標、中期計画」を文部科学省に提出し、その施策のための準備をすすめている。

第37回研究会では、こうした動きのなかで「情報教育」に取り組んでいる第一線の教員から、大学が現在進めようとしている「情報教育」に関する施策に至る経緯や狙い、実際に取り組んでいる内容、今後の課題や計画などについて報告をいただいた。

報告された事例を研究対象とし、大学教育における生協ならびに生協職員の役割を創造することが本研究会の大きな目標になっており、報告のなかで、各大学における「情報教育」環境充実のために、生協を含む事業者に対する大学・教官の期待、これまで生協が果たしてきたことへの評価を含む多くの提言や示唆をいただいた。

千葉大学の本條毅先生からは、本年度園芸学部としてPC購入をよびかけ、Open Officeをはじめとするフリーウェアの活用と学生向け講習会を実施してきた背景と経緯について報告いただいた。無線LAN環境を含む情報インフラ整備、教員の意識改革の必要性にまで議論が及んだこと、機種選定から生協に販売を任せるにいたった経緯、今後の課題や率直な悩みなどが共有された。またPC用のロッカー設置などなかなか気のつかないようなところまで学生への細かな配慮を伴って、非常に丁寧に検討されたことがうかがわれた。

東京学芸大学の伊藤一郎先生からは、本年度より実施

された必修科目「情報処理教育」へのノートPC必携化の検討経緯、大学側の背景・動機・狙い、学生のPC購入に当たっての配慮と準備、実際のトラブルサポート問題や今後の教科教育に関する課題などについて報告いただいた。情報教育はもちろん学校におけるコンピュータ環境のトラブルシューティングができ、専門教育にも優れた教員を養成する、というビジョンに基づく、長期にわたる調査と入念な審議経過が共有された。また購入時の分割払いや入学金免除者への貸与など、ここでも学生への配慮の行き届いた検討であったことがうかがわれた。同時に伊藤先生からは、大学生協に対して以下の期待が述べられた。

- 1) 大学は教育機関である。ここで活動する大学生協も、学生教育を担ってほしい。
- 2) 大学生協は、大学という同じキャンパスで活動する当事者としての意識をもってほしい。
- 3) 大学にできることとできないことがある。大学生協はそれを補完する存在であってほしい。

その後質疑応答も含めて、1時間以上にわたって討論が行われた。以下、報告と討論をつうじて特に話題になった事柄、提言、示唆から、今後の課題にすべきこと、研究テーマとすべきことをまとめる。

- 1 講義の継続的効率的な実施には、受講者のコンピュータ環境がある程度共通であることが必須となるが、なかなか実現が困難。また学芸大学における調査結果からも明らかのように、コンピュータの保有・非保有によって成績が左右されるような現状があるが、これは「教育の機会均等」という観点から看過できない問題。大学生協は、大学やメーカーと協力しながらこの問題にとりくむことができる。
 - ・ 高性能でなくても低価格な学生用標準機の提案
 - ・ 大学・学科ごとに講義で必要とされるソフトウェアや設定w pプリロードしたPCの販売、販売時初期状態への復旧ディスクの提供とリカバリーサポート
 - ・ 故障時の迅速な対応と修理中の代替機貸与
 - ・ その他サポートとアフターケア
- 2) 必要とされる様々なソフトウェアについて、個々大学がそれぞれのソフトハウスと契約することは大変な労力を伴う。もちろん教員としてこれを厭わないが、一括して各ソフトハウスと交渉し、

CIEC活動報告

－ 2002年度第2回運営委員会報告－

提供できる機関の存在が望ましい。またサイトライセンスなどの制度上の改善も求められる。著作権保護と利用者便宜を両立するには、大学生協のもつ関係性を活用することが有効である。

・コンピュータによる教育の効果的な促進には、大学法人が取得したソフトウェアライセンスを個人所有のコンピュータにインストールして教室以外でも日常的に使える環境が必要。現状では、この形態で契約可能なソフトハウスはほぼ皆無。法人サイトライセンスの個人利用に関する契約形態を検討すべきである。

・有効なフリーウェア・シェアウェアは、個人契約を前提としているため、指定教材としてこれらのソフトを使用するには、受講対象のすべての学生との個別契約を必要とする。このような契約を求めるのは非現実的であり、一括して契約できる条件整備が必要である。

3) コンピュータリテラシーは、アプリケーションソフトを中心に進められているが、今後のネットワーク環境の多様化のなかで、ネットワーク接続に関する基本知識や構造に関するリテラシー教育についてどのようにすすめるのかを検討する時期である。

文責：山口 久幸（東工大生協）



日時：2002年12月15日（日）10：00～15：00

場所：大学生協杉並会館 203会議室

出席：佐伯、松田、矢部、赤間、綾、一色、板倉、大野、小野、立田、野澤、原田

欠席：湯浅、武沢、筒井、若林

事務局：野口、石川、羽田

討議報告：

1. 佐伯会長挨拶（日本学術会議報告含む）

佐伯会長から「日本学術会議の在り方について（中間まとめ）」に関する報告がされた。また、第19期会員選出手続きが遅れていることについても併せて報告された。なお、「最終まとめ」が取りまとめられた以降も日本学術会議の在り方について意見を積極的に述べていくことは重要なので、注視していただきたい旨、会長から要請が出された。

（<http://www8.cao.go.jp/cstp/pubcomme/gakujutsu/iken.html>）

2. 各専門委員会、各研究部会からの報告と承認

専門委員会委員長、研究部会責任者から以下の通り報告がされ、提案内容に関しても承認された。

(1) カンファレンス委員会（小野委員長報告、提案）

・今年度実施された研究会について概要が報告された。カンファレンス委員会主催第31回～33回、34回は2004年3月予定。小中高部会主催第10回～13回。外国語教育研究部会主催第4回。また、研究会への参加状況と開催コスト等の効果性に関する質問が出され、昨年秋以降企画運営が改善され、企画立案、開催案内の取り組みが強化され、参加者数が大幅に増えるとともに参加できなかった方からの問い合わせ要望等が増えていることが報告された。（実施費用については昨年同様）

・来年度から各研究部会主催研究会についてもカンファレンス委員会と調整し日程等を組んでいくこと、研究会開催費用はカンファレンス委員会の予算として組んでいくことにより、CIEC会員からみてゆとりある参加が出来る一貫した研究会開催として年間計画化し、その実施に当たっても研究部会の負担感を軽減することが提案された。なお、次年度予算等との関係があるため、後述の議案とともに審議され、承認された。

・次年度開催の研究会から、非会員の参加については資料代として参加費500円徴収する事を確認した。

・東京以外の地域在住会員の要望に少しでも応えるために、関西地域および地域カンファレンス開催地域での研



研究会実施、ネットワーク委員会の協力を得て研究会のリアル配信の検討を行っていくことが報告され、確認した。

(2) 会誌編集委員会 (赤間委員長報告、提案)

・会誌13号発行報告と14号発行計画が報告され、確認した。

・2002年11月に期限切れを迎えた柏書房との契約を2回発行分(5月末発行)まで延長覚書を締結したこと、その後の取扱いに関して調査、協議中で、次回2003年3月会誌編集委員会でその方針を議論することが報告され、確認した。

・日本学術振興会の学術定期刊行物補助に関連して、季刊化や英文誌の発行等について検討している旨の報告がされた。なお、欧文化の検討に当たっては専門外の欧文を読むことの読み手のつらさなど、CIECという学会の会員所属の広がりへの配慮を是非考慮してもらいたいとの意見が出された。

(3) ネットワーク委員会 (板倉委員長報告、提案)

・ホームページのリニューアルに関して、そのイメージ版が提案され、概ね確認された。意見として、Newsletterに関しては資料としてのジャンルではなく、活動のジャンルに入れる方がよいとの提案が出され、その方向で進めることとした。また、活動報告についてはこれまでの各研究部会責任者任せにすると停滞するため、ネットワーク委員のボランティア的協力によりメンテナンスを格安の費用で外注化し、事務局との連携にて鮮度を保つ計画であることが報告され、確認した。CIECご案内の英語版についても、HPリニューアルと共に作成を急ぐ。なお、その他意見要望があれば、至急寄せてもらいたい旨の要請がなされた。(年末に 版をアップし、期限を決めて理事の方の意見を集約します)

・メーリングリストについても、活動内容などわかりやすい名称、参加しやすいスタイルなどを検討中であるが報告された。あわせてメールマガジンの発行など事務局と協同して進めていくことが報告され、確認した。

(4) 国際活動委員会 (松田副会長報告、提案)

・「国際交流具体化のためのプロジェクト」の発足と委員について確認した。プロジェクト委員長に小林理事(新潟大) 委員に和田理事(長野大) 橋先生(早稲田高等学院)をお願いし、必要に応じて委員を増員することとした。

・CIECとの学術的な交流、協同を発展させることを展望して、コンピュータ利用教育に関わる研究課題を共有で

きる海外学術団体とその研究者を調査中。2003PCカンファレンスの中で、その中心的な研究者を招聘し、特別講演会を開催することについて企画検討中であることが報告され、確認した。

・今後、科研費申請に適合させる内容や企画準備について検討していくことも報告された。

(5) 小中高部会 (部会世話人 綾委員報告)

・12月14日研究会、高校「情報第2弾」出版について、小中教育向けノウハウ本の出版についての報告がされ、確認した。小中向けの本について、ノウハウ本は多数出ているため、そのスタンスと内容についての質問が出された。検討に当たっている当事者がいないための確かな回答にはならなかったが、CIECの主旨に則って、いわゆるOSやアプリケーションに沿ったハウツウものではなく、根本原理がわかれば誰でも対応できるというその「ミソ」の部分をはっきりさせるような本づくりを目指していることが報告された。

・また、本づくりのプロジェクトについては、今年度で完成することが出来ないことから、次年度もプロジェクトとして継続していく意向であることが報告された。

(6) 外国語教育研究部会 (部会責任者 野澤委員報告)

・この間取り組んできたCD-ROM書籍「最新外国語CALLの研究と実践」の出版についての具体的な計画が報告された。序、巻頭言に続き、論文3本、実践報告4本、その他4本、コンテンツSamplerを掲載する予定。3月発行、500枚作成予定。

・次年度に向けては、英語教材の開発をネットワーク委員会の協力を得て進めていく予定であることが報告された。

(7) 大学生協共同プロジェクト 電子教材専門委員会報告 (協同プロジェクト委員長 一色委員報告)

・2002年度に取り組んできた内容(電子教材紹介のwebを使った手法検討とその構想、プロトタイプ的设计、インターフェイス的设计、取り扱うカテゴリ) PCカンファレンスでの中間発表等について報告がされた。また、2003年度については引き続き、各カテゴリの作成と収集を行い、公開を目指すことが報告され、確認された。

・2002年度計上の業務委託費については、50万円を今年度見通しとし、残金をそのまま2003年度に予算として繰り越すことで確認された。

・2003年度の委員として、CIEC側から引き続き、委員長として一色委員、委員として湯浅副会長、原田委員、宿久

先生(鹿児島大) 楠元先生(早稲田大) 辰己先生(神戸大)を選出することとした。

3. 2003年度CIEC TypingClubの取り組みについて(連合会CSチーム石川さん報告)

・2003年度のCIEC TypingClub企画概要について報告された。なお、Linux版の開発、キーボード画面の改良については2003年度は見送ることとなった。(当初想定以上の作業量の増加のため、Windows版のみとなった)

・次年度の計画数量は、今年度見通し約9,000本を大幅に上回り、新学期集約本数により10,000～14,000本想定となっている。

・質問として出された講習会実施に伴う希望会員生協別サーバー設置については、要望に基づきこれから実施されるとの回答がされた。

4. 2002年度決算見通しと2003年度予算編成に向けて(事務局報告、提案)

(1)2002年度収入見込みと支出見通しについて報告し、確認した。

・会費収入については、現時点での納入率は高いものの、予算対比で3%程度下回る見通し。その他の収入は、ほぼ計画通りの見通し。

・支出は、全体に現時点では計画通り。決算調整を考慮し、Web決済システム準備、プリンター購入等を今後計画(後日申請予定)の予定。最終で100万円程度の時期繰越金を準備する予定。

(2)2003年度概算予算案とプロジェクト事業費決定について提案し、前後の関連する案件を整理した上で、予算確定のスケジュールも含めて確認した。

・個人会員の70名～100名獲得、団体会員の10会員獲得をめざし、自然退会を考慮に入れ収入計画を作る。

・研究会予算にこれまで継続的に行われてきた小中高部会や外国語教育部会の研究会費用を計上し、統一的に実施していく。

・予備費に30万円程度の予算を計上し、研究部会の自発的な組織活動について申請があれば支援できる状態を目指す。

・2003年度プロジェクト事業費は5件程度、2,500,000円とする。

5. 小中高部会等の会則上の位置付けおよび予算措置についての検討

事務局からこの間の検討経緯に沿い、検討すべき方

向について並列的に提案を行い、論議した。討議の結果、以下のように決定した。

・研究部会の位置付け設け予算措置をとるような会則上の変更等は行わない。

・研究部会は会員の自発的な組織であり、その活動を積極的に展開していくための場の提供については、各専門委員会が積極的に支援を行っていく。その意味で、これまで個別にプロジェクト申請で行ってきた研究会については、予算措置も含めてカンファレンス委員会で協議協力する形に改める。

・研究部会の年間活動を通じて、予算措置が必要な場合、予め事業計画が具体的に決定しているものについてはプロジェクト申請を行い、具体化されていないものについては都度申請により一定の補助が出来る予算を組むこととした。

6. 大学生協職員部会設立の件(小野委員報告、提案)

以下の通り、提案を受け、確認した。

・大学生協職員部会準備会からの提案どおり、「大学生協職員部会」の設立について承認をする。

・2002年12月22日大学生協連全国総会終了後に同会場幕張国際会議場で実施される研究会および発足の集いについて、申請に基づき研究会予算から、講師料および会場費合わせて3万8千円を出費することを確認した。

7. 2003年度プロジェクト事業費申請に関する手続きの件

プロジェクト事業費の総額、想定する件数の変更、申請書式記入項目の一部追加を行い、確認した。また、選考メンバーおよび選考会日程についても原案通り確認した。

8. 組織基盤整備WGからの提案内容検討の件(矢部副会長提案)

以下の2点を除き、提案通り確認した。

・8月以降入会の年会費の減額措置については、提案を取り下げ、削除する。

・名簿作成については、その取扱いに関しての内規を定め、その上で名簿掲載者の了解を得る。また、学生会員に関しては応諾確認を許諾者に限る等の配慮を行い、慎重に取り扱うこととする。

9. ホームページのリニューアル提案の件(ネットワーク委員会報告時に確認)



10 2003PCカンファレンス実行委員会と課題検討の件

(1) 分科会応募規定変更の件（登壇資格の制限他）

分科会についてはCIEC運営事項であるため、分科会担当の先生方がまとめた応募規定に基づき、討議を行い、一部を修正の上、確認した。

・発表（登壇）資格について、応募時の「入会者」を正しく表現し、「入会予定者」に改める。

・発表（登壇）資格について、企業、NPOからの発表本数制限に関する項目は削除する。（なお、運営委員会後に分科会担当の先生方との調整で、分科会担当による権限としては内容に関する採否のみであり、本数制限等は一切行わない、行えないことを確認した）

・著作権譲渡に関する規定のビデオ録画像の肖像権、著作権の取扱いについては、予定される場合であることを明記し、応募の条件としないことを確認した。（なお、運営委員会後に分科会担当の先生方との調整で、問題の本質に関わる表現と取り決めが必要なことから、この項を削除し、別な場で取り決めを行い、必要に応じて後日発表者に許諾を求めることとした）

(2) 全体会講演会、シンポジウムに関する件

カンファレンス委員長の小野委員から、PCカンファレンス実行委員会に提案する全体講演会の講師および講演会企画主旨がほぼ内定したことが報告され、確認した。

(3) テーマその他報告事項

事務局より、この間の第1回実行委員会報告と開催主旨について報告をした。副実行委員長の板倉委員より、ITプレゼンの改善案、イブニングトークの企画案等の検討案が報告された。

11. その他

(1) CIEC 諸会議での交通費の算出基準について（PCC 会議との調整）

CIEC諸会議とPCC会議での航空運賃支払い基準が一致してないことから事務局での計算が1本化出来ない場合が生じており、複雑化を避けるため事務局より以下の通り提案があり確認した。

・交通費の内、航空運賃の算出基準については、往復運賃とする。なお、時間的制約のため、同一航空会社を使用できない場合は、事前に事務局まで申し出ていただくこととした。

(2) 専門委員会構成員の確認について

各専門委員会の委員について、専門委員会細則に則り委嘱をするため、委員会名簿を提出してもらいたい旨の報告を行い確認した。（各委員長に、後日メールでご案内する）

(3) 今後のスケジュール

今後のスケジュールについて、別紙の通り提案し確認した。（なお、案内については、開催期間等が近づいた時点で都度確認を入れる）

・第3回運営委員会は、次の通り。2003年5月31日（土）11:00～15:00

－ 2002 年度第3回運営委員会報告 －

日時：2003年5月31日（土）午後1時～5時

場所：大学生協杉並会館 2階203会議室

出席：佐伯、矢部、湯浅、小野、小林、武沢、立田、筒井、野澤、板倉、大野、今國（監事）

事務局：野口、羽田

欠席：松田、赤間、綾、一色、原田

議題および討議内容報告：

討議に先立ち、湯浅副会長に議長を務めていただくことを確認した。

1. 2002 年度事業報告および2003 年度事業計画に関する件

(1) 専門委員会について

各専門委員より、事業報告と次年度事業計画の報告がされ、確認した。研究会開催について地方で参加できない方のために、多地点ネットワーク等の検討課題が出され、ネットワーク委員会で検討いただくこととした。

また、会誌編集委員会の報告として、著作権許諾についての追加資料を添付することが報告された。

国際活動委員会については、ホームページ上でCIECの活動を紹介できるようにしてもらいたいとの要望が出された。この点は、「CIECのご案内」の改訂に伴い、現在翻訳作業中のものをホームページにも掲載する旨、事務局から報告した。

(2) プロジェクト事業

プロジェクト成果物の著作権の取り扱いや複数年にわたる申請などの質問・意見が出された。意見として出され

た内容はすでにプロジェクト申請審査会の次年度申し送り事項でも出されており、詳細にわたって原案もあることから、次年度プロジェクト事業を計画する12月運営委員会の議案として取り上げていくことを確認した。

(3) 活動報告

昨年度の活動日誌を確認した。

2. 2002年度決算報告および2003年度予算に関する件報告、討議に先立ち、事務局よりCIEC個人会員・団体会員の現状およびこの1年間の動態について報告し、確認した。

(1) 財政報告

12月運営委員会および4月初旬のMLにて見通しを出していることから、特徴点と最終収支報告に関して報告し、確認した。

収支差額について積み立ててはとの意見も出されたが、当初提案どおり、次年度は繰り越すことで確認された。

(2) 監査報告

監事の今國さんから、監査の実施報告と監査所見が出された。

所見事項のプロジェクト事業費の行動費支出に関する部分は該当プロジェクトチームのプロジェクト事業活動が今年度も継続されることから、その旨検討いただくこととした。

また、「部会」の会則上の整理については、昨年度からの基盤整備ワーキング(矢部、小野、大野各氏)に原案の作成を委ねることを確認した。

(3) 予算計画

事務局から概要が提案され、原案通り確認した。

3. 役員選挙に関する件

(1) 補充選挙の実施について

今回の定例総会では、補充選挙を実施しないことを確認した。

(2) 専門委員会の委員の選任について

2003年度専門委員会委員一覧に基づき、2004年度委員の変更の有無を確認した。

カンファレンス委員会で、委員長の交代が実施されることを確認した。

4. 2002年度第2回理事会、2003年度定例総会 準備に関する件

(1) 理事会、定例総会議案確認の件

定例総会議案および議案書掲載内容について、確認した。

引き続き、定例総会議案以外の理事会議案について確認し、以下のとおりとした。

- ・2003PCカンファレンス最終準備状況確認の件
- ・会誌出版(発売)元の取引先変更確認の件
- ・2004年度専門委員会 委員確認の件
- ・学会表彰検討の件
- ・専門委員会細則および「部会」の会則上の取り扱い検討の件
- ・その他

(2) 定例総会の運営に関する件

定例総会の実施方法について、形式的な運営を改め、CIEC会員以外の方も参加して有意義な時間が過ごせ、入会動機に役立てられる内容とすることを確認した。

概要は以下のとおり。

- 1) 会則、総会運営規約に則った運営方法は継続する。
 - ・書面による提案、一括採択に改め、実質的な口頭報告と討議は行わない。
 - ・提案から採択までを20分以内で終了するように改める。
- 2) 一般参加者にCIECの事業活動を紹介する、入会を勧める総会としていく。
 - ・各専門委員会の活動や研究部会の活動などをわかりやすくご紹介いただく。

(3) 理事会招集に関する交通費・宿泊費等の支給の件
鹿児島大開催ということで、交通費がこれまで以上にかかることから、理事の方々の協力を得て、なるべく多くの方が参加できる状況を作ることを確認した。
確認内容は以下のとおり。なお、早めの申し込みが必要なおことから、理事会関係の送付に先立ち、案内を行うことを確認した。

- 1) 鹿児島大学生協が案内している宿泊パックを利用することが可能な方は、
 - ・東京発 45,800円、関西発 35,800円を支給
 - ・市内交通費は、別途支給
 - ・緊急で便の変更をする場合は、新規発券分を後日半券にもとづき支給
- 2) パックが利用できない地域から来られる場合は、なるべく得割等を利用いただき、申告金額の交通費と宿泊費1泊分 7,000円を支給。
 - ・申告金額には、市内交通費を含みます。
 - ・緊急で便の変更をする場合は、変更発券分を後日半券にもとづき差額支給



3) 研究費等で参加が可能な方は、その旨をお願いをする。

5. 2003PCカンファレンス開催に関する件

(1) PCカンファレンス準備状況

時間の関係で、文書報告とし、割愛した。

(2) PCカンファレンス実施に向けての確認事項

会誌へのPCカンファレンス報告について、カンファレンス委員会が全体の提案を行う。全体会、シンポジウムについてはカンファレンス委員会が行う。分科会報告のまとめについては会誌編集委員会が行う。その他の報告についてはカンファレンス委員会より依頼することを確認した。

6. その他

(1) 会誌編集委員会報告

議事録どおり確認した。

(2) 会誌出版(発売)元の取引先変更の件

出版元変更にかかわる中間報告に基づき、電機大出版局としていくことを確認した。なお、現在も交渉中のため、詳細および契約書については調整完了次第、機関会議にかけることを確認した。

(3) CIECの日本語名称検討の件

CIECの日本語訳が「コンピュータ利用教育協議会」(会則第1章第1条)であることから、日本学術会議登録団体でありながら学会としての参加申請等に不便があるとの意見を受け、検討した。敢えて協議会としていることの意味づけの確認、広範な会員の意見を聞くべきだ等の意見が出された。

(4) 学会表彰検討の件

事務局提案に基づき、学会表彰規定を2003年度に定め、2004年度定例総会から学会表彰を実施していくことを提案する旨、確認した。原案の修正内容(概要)は以下のとおり。(詳細別紙)

・表彰の種類は、「学会賞 功労賞」「学会賞 論文賞」の2種類とする。

・個人だけでなく団体も適用する。

(5) 交通費支給に関してこの間出された意見と対応

事務局より、この間理事会MLでの論議および対応について報告した。なお、定例化している会議以外については、今回の理事会交通費のように確認を行っていく旨報告し、確認した。

(6) 会計年度(4~3月)と機関会議開催年度(8~8月)の不一致に関する件

これまでどおりの扱いとすることで、確認した。

(7) その他

1) 2004年度の概要スケジュールを提案した。(未確認)

2) 電子教材委員会からのコンテンツ収集活動への協力について確認した。

3) 著作権処理に係わる処理について(未確認のためMLにて再度確認)

4) 会誌の印刷ミスに関して報告した。

5) VOA教材コンテンツ制作に関わる機器の購入について口頭で確認し、再度MLにて提案を行うこととした。

6) 小中高の出版物の一部買取の件

口頭で提案し、再度MLにて提案を行うこととした。

— 2002年度第2回理事会報告 —

日時：2003年8月5日(火)9時00~11時

場所：鹿児島大学郡元キャンパス総合教育研究棟

出席：佐伯、松田、矢部、湯浅、青木、赤間、綾、石川、板倉、指宿、上村、奥山、小野、籠谷、小西、小林、榊原、武沢、立田、田中、筒井、鳥居、仲田、中村、松浦、宮本、森(夏節)、森(直之)、吉田、若林、和田、

監事：今國

事務局：野口、羽田

欠席：一色、熊澤、野澤、原田(康)、平井、大野、原田(永)、泉谷、玉屋

妹尾、辻(監事)

議題および討議内容

1. 2003年度定例総会議案確認の件

矢部副会長より、定例総会議案書に基づき総会議案の提案が、監査報告については今國監事より詳細報告がされ、議案5の「CIEC会則一部改定承認の件」を除き、承認された。なお、事務局からは、各議案の詳細資料として添付した理事会報告資料について説明を行った。

会則一部変更の件は、会則文書の文言の一部を「本会の運営に貢献」から「本会の活動において貢献」に変更し、確認した。(詳細は、議決書の会則参照)

引き続き矢部副会長から、書面にて出された意見が紹介され、その回答が提案され確認をした。

2. 定例総会の運営に関する件

2003年度CIEC定例総会の実施方法を再確認し、事務局の提案に基づき、1)運営スケジュール、2)運営体制、3)活動紹介に関する報告者の確認を行った。報告者は以下の

とおり。

専門委員会活動報告については、小野カンファレンス委員長と板倉ネットワーク委員長、部会活動報告については、楠インタラクティブ教育研究部会長、世話人武沢小中高部会長、森生協職員部会世話人、野澤外国語研究部会長
3. 2003PC カンファレンス最終準備状況確認の件
事務局より、最終参加状況および準備状況について報告を行い、確認した。

4. 会誌出版（発売）元の取引先変更確認の件

会誌発行元を次回発行分から柏書房から電機大出版局へ変更することを確認をした。

5. CIEC の日本語名称検討の件

運営委員会で論議された内容を紹介し、標記検討事項についてその検討方向を組織基盤検討ワーキングに委ねることを確認した。

6. 学会表彰検討の件

CIEC 表彰規定(案)および推薦書について検討を行い、別紙のとおりとすることを確認した。

提案に関する主な変更点は、表彰の種類における範囲を明確にした点、誤字の訂正、推薦の条件を厳密化した点である。

7. その他

(1) CIEC ご案内(英文)の確認について

CIEC 案内文(英文)を配布し、各理事に該当する箇所について点検を依頼した。また、和文も含めて案内文の表紙デザインについて、アイデアをいただきたい旨、要請した。

・表紙について、和文を含めて、ご提案ください。

(2) 2003 年度機関運営スケジュールの確認（大まかな目安として確認した）

- CIEC 表彰規定 -

この規定は、CIEC が学会として行う表彰に関する事項について定めたものである。

(表彰の種類)

第1条 CIEC が学会として行う表彰は、以下のとおりとする。

(1) 学会賞 功労賞

コンピュータ利用教育にかかわる研究調査、啓発普及もしくは出版文化活動において、顕著な功績があったと認められる者。

コンピュータ利用教育に関し、画期的な業績によって特に貴重な学術貢献をなしたと認められる者。

(2) 学会賞 論文賞

本会の会誌またはこれに準ずる刊行物に論文を発表し、コンピュータ利用教育の発展に独創性および将来性をもって寄与したと認められる者。

第2条表彰は、理事会の議を経て会長が行う。

第3条表彰は、表彰状を授与して行う。

2) 表彰には、副賞または記念品を添えることができる。

3) 表彰は、年に1回、CIEC 定例総会において行うこととし、各賞とも表彰は原則として2件以内とする。

(推薦の条件)

第4条 推薦者および受賞者候補者は推薦の時点において、本学会の会員であるものとする。

(表彰選考の方法)

第5条 表彰を適正に行うために、表彰選考委員会を置く。表彰選考委員会は、所定の推薦書による公募を行い、表彰規定に基づき総合的に審査する。

2) 表彰選考委員は以下の数名により構成する。

副会長 1名

会誌編集委員長 1名

運営委員会で決定するその他の理事 若干名

3) 推薦書締め切りは毎年4月末日までとし、前年12月末日以前3カ年間の業績または発表された論文を対象とする。

4) 表彰選考委員会は、推薦者に選考に当たって、参考資料の問い合わせを行うことができる。

2003年8月4日 2002年度第2回CIEC理事会決定



－ 2003 年度 CIEC 定例総会報告 －

日時：2003 年 8 月 7 日(木)12：45 ～ 13：35

場所：鹿児島大学郡元キャンパス共通教育棟 100 番教室

出席：本人出席 55 名、書面 83 通、委任状 21 通

議事

1．開会宣言および正副議長、資格審査委員の選出
籠谷理事(関東学院大学)より、開会宣言。引き続き、理事会推薦による次の委員候補者が提案された。議長には若林理事(京都大学)、副議長には吉田理事(大阪教育大学)、資格審査委員には鳥居理事(椋山女学園大学)と森夏節理事(酪農学園大学)。他の立候補者がいないことを確認し、拍手にて選出を確認した。

2．総会運営に関する確認および議事運営、採決方法の提案と確認

若林議長より、総会運営に関して会則および運営規約からの確認が行われた。引き続き、本総会の運営方法および採決方法について次のとおり提案され、確認をした。

「提案は 1 号議案から 5 号議案まで一括提案、質疑は書面にて 13 時 25 分まで議長席にて受付、議案提案後、各専門委員会と各研究部会から活動報告を受ける。報告終了後に質疑の回答を行い、採択をおこなう」

3．総会成立の確認

鳥居資格審査員から総会の成立要件を満たし、2003 年度 CIEC 定例総会が成立していることが報告された。

4．議案 1 から議案 5 までの一括提案

矢部副会長より議案 1「2002 年度事業報告と 2003 年度事業計画承認の件」、議案 2「2002 年度決算報告承認の件」、議案 3「2002 年度収支差額処分承認の件」、議案 4「2003 年度 CIEC 予算承認の件」、議案 5「CIEC 会則一部改定承認」の一括提案がされた。引き続き、書面議決書と一緒に届いた会員からの意見(8 通)が紹介され、回答についての報告がされた。

妹尾監事より議案 2 の一部「監査報告承認の件」の監査報告がなされた。

5．専門委員会からの活動報告と今後の計画

小野カンファレンス委員会委員長より研究会活動を中心としたカンファレンス委員会の活動が、板倉ネットワーク委員会委員長より CIEC タイピングクラブの今新学期の

取り組み報告とメーリングリストの整備などネットワーク委員会の活動が紹介、報告された。

6．各研究部会からの活動紹介と参加呼びかけ

2002 年度に新設された 2 つの研究部会、インタラクティブ教育研究部会については佐伯会長から、生協職員部会について森直之世話人から活動紹介と参加呼びかけについて報告がされた。

引き続き、議案書資料に基づき、外国語教育研究部会の上村代表世話人、小中高部会の武沢部会長より報告と今後の計画が報告された。

7．質疑、回答および採択

鳥居資格審査委員より、出席状況、成立状況が報告され、拍手で確認した。

若林議長より、書面による質疑がないことが報告され、採択手順(議案ごとに個別かつ連続的に採択)説明後、直ちに採択に移った。結果は、議案 1 から議案 5 まで圧倒的多数で採択された。(なお、出席賛成者数および委任状に書面議決書の数が増加された)

8．閉会

若林議長より、議事終了が告げられ、正副議長の解任と CIEC 定例総会の閉会が宣言された。

< 2003 年度 CIEC 定例総会 意見及び回答 >

「会員数の内訳」について

1、生協職員の激減

かつて CIEC は大学生協丸抱えで、生協に近い先生方だけの集まりでしたが、今では生協の手をはなれ自立した学会として歩んでいます。でも生協職員にとっては一番身近で敷居の低い学会であることには変わりありません。生協職員部会の活動が活発化していくことが求められます。

回答：CIEC は、その設立の過程・趣旨から、きわめてユニークな学術組織です。中期課題の検討において、このユニークさの維持・発展と、学術組織としての基盤整備の両面が課題として挙げられ、現在これに向けた努力をしているところです。そのユニークさの一つである裾野の広さ・多様さは、PC カンファレンス同様、大学生協との連携を抜きには語れません。CIEC の大きな柱である高等教

育において進行中の未曾有の改革の嵐の中でも、より強固な大学経営と学生のための大学運営について、大学生協の役割が大きく期待されています。その中でも、本会にかかわる教育分野についての期待はさらに大です。大学生協・生協職員の参加を切に願うとともに、CIECとしても、参加の拡大に向けた努力をさらに進めてまいります。

2、小中学校教員少なすぎる。書類の学会との違いを明確化し、この学会のもつユニークで敷居の低い特徴をアピールすべきでは。コンピュータ&エデュケーションを各地の教委などに紹介するのはどうでしょうか。情報担当教員の研修などでCIECを紹介させてもらう場を多く設けるとか。

回答：1に回答したとおり、参加の広さ・多様さがCIECの最大の特色です。これを生かした研究・活動を推進できるよう、ご提案の取組の検討も含めて、努力を続けてまいります。

「その他」

いつもお世話になっています。もっと参加しなければと思うのですが、なかなか……。私みたいな会員を増やすにはどうすればよいのでしょうか。すすんだ発表事例もいいのですが、「どうもうまくいかない」という発表事例があれば輪が広がると思うのですが。

回答：PCカンファレンスやCIECの会誌・ニューズレターなどでは、ご指摘のような事例が発表されることを期待しています。ぜひ、そのような経験交流を進めてまいりたいと考えます。会員の皆さんにお願いするとともに、PCカンファレンスでは学会式の発表以外に、イブニングトークの活用などの工夫をしております。会誌などについても、ぜひ積極的に取り扱えるようにしたいと考えております。

「議案1について」

最近の活動等に例えば代6階の研究会のように「大学生協の組合員」優遇するような文言が時々見られる。ところが私の大学のように生協が「もともとない」ところである立場から考えると、「大学教職員並びに学生・院生」という文言の方が適切であると考えられる。因みに私が学んでいる岐阜県での私立大学生協のお店は一店もないらしい。

回答：CIECは、すべての会員を優遇しています。会員すべてが主役となれるよう、努力しております。会員のある層をターゲットにした活動を行うこともあり、そのときは確かにその方たちが主役ですが、すべての活動を通して、皆が主役であるようにしたいと思っています。もし、足りないところがありましたら、適宜ご指摘ください。常時、会員の交流場所を確保し、ご意見を承ってまいります。

「議案の提案方法」について

・2002年度事業報告と2003年度事業計画承認については分けて諮るべきだと考えます。事業報告と決算報告がセットというのであればその方が(良くはないですが)話の筋は通っているような気がします。

回答：議事進行の都合上、決算・予算同様、前後の関連もありますので、事業報告と計画を同時に提案、ご審議いただいております。どちらについても、またその相関についても、ご意見を承りますので、ご了解くださり、ご協力をお願いいたします。

「表彰規定」について

・表彰規定は気持ちはよくわかりますが、名譽会員では足りないのでしょうか？

回答：「表彰規定」の趣旨は、会への永年の功績を讃える「名譽会員」と異なり、学会奨励賞のようなものを念頭においております。若手の育成や、ユニークな活動・研究の促進を願って制定します。

「活動全般」について

CIEC会員になって1年になります活動内容に満足しております。これからもよろしくお願いいたします。

回答：どうも有り難うございます。今後も積極的なご参加をお願い申し上げます。

「委任状」について

委任状のフォームについて、CIECの角印のようなものを押印したほうが良いと思います。

回答：総会運営の方法については、より公正で民主的な運営になるよう、努力してまいります。ご提案も考慮のうえ、今後の検討課題とさせていただきます



<CIEC新会員のご紹介>

CIECに入会された方々を紹介します

団体

プリンストンテクノロジー（株）様

個人

駒田 忠一様 京都学園大学 教員
植村 八潮様 東京経済 大学院生
辻本 利雄様 明治薬科 大学教員
大和田 栄様 東京成徳短期大学 教員
坂口 晴一郎様 九州大学 教員
松久 昌子様 関西医科大学 教員
小浦 太郎様 大学生協東京事業連合 生協職員
峯村 努様 東京電機大学生協 生協職員
石坂 雅文様 和光大学 大学職員
小川 博様 滋賀県立八幡工業高等学校 教員
川端 成実様 鹿児島市立西陵中学校 教員
今井 兼範様 スリープロ株式会社その他 講師
大塚 一徳様 長崎県立大学 教員
梅田（笹田）美和子様 鹿児島県立市来農芸高 教員
森安 力様 全国大学生協連生協 職員
茂垣 薫様 全国大学生協連生協 職員

<PCカンファレンス北海道2003>

開催日時： 2003年10月25日(土)～26日(日)

開催場所： 北海道教育大学函館校 函館市八幡町1番
2号

主催： PCカンファレンス北海道2003実行委員会

共催： CIEC(コンピューター利用教育協議会)、渡島情報教育研究会、全国大学生協連合会北海道地域センター
実行委員長 中村 紘司 (北海道教育大学函館校)

スケジュール

・第1日目：10月25日(土)

13:00～16:00 講演会

岡本 薫氏 (文化庁学術研究助成課長：前文化庁著作権課長)

16:30～17:30 研究・実践報告

18:00～19:30 イブニング・トーク

・第2日目：10月26日(日)

09:00～10:30 レポート発表

10:30～11:00 ITフェア

11:00～12:30 レポート発表

参加のお申し込み

申し込み先：

〒060-0808 札幌市北区北8条西6丁目 松村ビル3F

大学生協北海道地域センター内

PCカンファレンス北海道2003事務局(担当：黒沢孝彦)

Tel: 011-737-5986 Fax: 011-737-3701

E-Mail: pcch@hokkaido.seikyoku.ne.jp

Webからの申し込み：

<http://www.hokkaido.seikyoku.ne.jp/pcch2003/participation>



<お知らせ & お詫び>

■お知らせ■

2003 PCカンファレンス(鹿児島大学)について

2003年8月5日から8日まで、鹿児島大学で開催されました2003 PCカンファレンスにおいて、台風10号による悪天候のため、8月8日の分科会が中止になりました。

前日から大雨警報・暴風警報が発令される中、参加者の安全を確保するために取った措置ではありますが、参加者の皆様には大変ご迷惑をおかけしました。

なお、中止された8日の分科会発表に関しては、分科会企画を統括するCIEC(コンピュータ利用教育協議会)として、Webページ(<http://www.ciec.or.jp/>)で上記の事情を説明するとともに、発表のためにあらかじめ提出された論文(論文集)を受取り、これを発表したものとみなします。

もし、不明の点がございましたら、CIEC事務局(jim@ciec.or.jp)までお問い合わせください。

2003 PCカンファレンス実行委員会

上記Webページにつきましては、作業が終了次第、改めて皆様にご案内いたします。

■ Newsletter 発行遅延のお詫び ■

CIEC事務局体制変更に伴い、この間、Newsletterの発行が不規則、遅延いたしておりますことを

深くお詫び申し上げます。

ようやく体制が整いましたので、今後遅れることなく、また、充実した内容が掲載できよう

発行していきます。何卒、よろしく願いいたします。

■募集します■

個人会員、団体会員の皆様からの積極的な投稿を募集します。

1. CIEC会員の皆様にお知らせしたいこと
2. 会員の方々の活動紹介や呼びかけ
3. 団体会員様からのお知らせ、ご案内など

ご不明な点は、CIEC事務局(jim@ciec.or.jp)までお問い合わせください。





研究会
